

### 万葉集巻一一・二六七五番歌「君が着る三笠の山に居る雲の立てば継がる恋もするかも」の解釈について

Yamazaki, Kazuko / 山崎, 和子

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要 / 日本文学誌要

(巻 / Volume)

74

(開始ページ / Start Page)

23

(終了ページ / End Page)

33

(発行年 / Year)

2006-07

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010141>

## 万葉集卷一一・二六七五番歌

「君が着る三笠の山に居る雲の立てば継がる恋もするかも」の解釈について

山崎 和子

はじめに

万葉集卷一一・二六七五番歌「君が着る三笠の山に居る雲の立てば継がる(立者継流)恋もするかも」について、諸注は次のように解釈している。<sup>(注)</sup>

『大系』…三笠の山にかかつて居る雲が、消え失せるとすぐかかつて絶えないように、止む時もない恋をするこ  
とである。

『注釋』…三笠の山に居る雲の立ち登つてはまたあとから繼いで来るやうに、あとからあとからつゞいて絶えない恋をすることよ。

『新全集』…(君が着る)三笠の山にかかつて居る雲が立つてはまた湧き出るように絶え間ない恋さへもすることよ。

『釋注』…あの方がかぶる御笠、その御笠の山にかかる雲が立てばまた湧き出るように、あとからあとから燃え立つせない恋をしている。

『新大系』…(君が着る)三笠の山にかかつて居る雲が後から後から立ちのぼつてくるように、止むことなく続く恋を私はすることだなあ。

いずれも原文表記の「立」を「立つ」と訓むが、その語義解釈と雲の「立てば継がる」景の把握に相違が見られる。まず、『大系』の「立つ」を「消え失せる」意と捉え、「立てば継がる」は雲が「消え失せるとすぐかかつて絶えない」とする大意は、他の注釈書の把握と大きく異なる。『古義』の「立は、起て往を云、雲の起去かと思れば又あとより續きて起をいへり」に類同する。『釋注』は「上からは、いったん湧き立つと次から次へと追い繼いで湧く、の意。下へは、我が心に燃え立つと際限がなくなる、の意」として、雲が湧き立ち始めると次々湧

く様と捉えている。「新大系」は「立てば」を訳出せず、「継がる」に含めて「後から後から立ちのぼつてくる」と把握する。近年は『釋注』『新大系』のように、三笠山にかかつている雲が湧き始めると次々に湧き出る様と解釈する傾向にあるように思われる。しかし、従来の条件節「立てば」の把握と、雲の景の解釈には、問題があると考える。

当該歌について小山なかば氏は、「タツ」を「立ツ」と「断ツ」の掛詞と解し、一首の意は「(君が着る)三笠の山に雲がかかつている。雲といえは立つものであるが、いくら断ち切つてもまた自然と続いてゆく、そんな切ない恋を私はしているものだなあ。」として、従来の解釈に「石を投げられた。氏は「已然形+ば」の条件表現についても、前件と後件では「極端に言えは逆の意味を示すといえるほどの距離がなければならぬ」、よって「立てば継がる」ではその条件が成立しないと結論づけられたが、それは『新全集』が「継ガルルは、ルルが自発を表し、思い続ける意だが、それに立テバという条件を置くことと理由は不明」と述べ、「立つ」と「継がる」の因果関係に不審を示したことや、『新大系』が「立てば」を訳出しない解釈に繋がる問題である。万葉集中「立てば継がる」は当該歌のみであり、「已然形+ば+継がる」表現も、類歌に「止めば継がる」が一例のみあるという、独自性を持つ表現である。条件表現「已然形+ば」における前件・後件の関係、また類歌との比較検討において、二六七五番歌は次のように把握できる。

1 万葉集において雲や恋を「絶(断)つ」の表現は成立しがたく、「立てば」としてのみ把握される。「三笠の山に

居る雲の立てば継がる」は、「居る雲」の上昇する「立つ」動きの顕在化を契機として「居る」ことの継続が起き、絶えず三笠山に雲の「居る」景を描出する。それは「継がる恋」を具象化する序詞表現である。

2 一首の意は、「あなたが着る(御笠の)三笠山にかかつている雲が上昇して行くと、自然とまた継いで(雲が居る)、そのように絶えず心にかかる恋をすることだわ」。

### 一 他動詞「絶つ」と自動詞「絶ゆ」

ここではまず、小山氏の提唱された掛詞「立つ」「絶つ」について検討してみたい。万葉集には「白雲の立つ」と「龍田の山」を掛けた「白雲の龍田の山」(巻六・九七二)、名が「立つ」と「立田山」(巻一七・三九三)、「奥つ白波立田山」(巻一・八三)、「韓衣龍田の山」(巻一〇・二一九四)など「タツ」の掛詞表現は数多く用いられているが、動詞「立つ」「絶つ」の掛詞は、万葉集のみならず平安朝の和歌にも類似を見ないように思う。しかも万葉集において、他動詞「絶つ」と自動詞「絶ゆ」は次のように把握される。

集中3例ある他動詞「絶つ」は、「祖の名」2例、「繩」1例を対象とし、祖先の名声を断絶させたり、馬を繋いだ綱を切る意を表す。次の仮名表記の2例が確例である。

1 ∴ 虚言も祖の名断つ(多都)な 大伴の 氏と名に負へる 大夫の伴(巻二〇・四四六五)

2 既なる繩絶つ（多都）駒の後ろがへ妹が言ひしを置き  
て悲しも（卷二〇・四四二九）

一方の自動詞「絶ゆ」は、雲に関して次のように用いられている。「白雲」は「雲」と対象を同じくしながら、翻訳語としての斬新さが知識人に好まれたと言<sup>（注）</sup>う。

3 伊豆の海に立つ白波のありつつも継ぎなむものを乱れし  
めめや（卷一四・三三六〇）

或る本の歌に曰はく、白雲の絶え（多延）つつも継  
がむと思へや乱れそめけむ

4 王は千歳に座さむ白雲も三船の山に絶ゆる（絶）日あ  
らめや（卷三・二四三三）

5 白雲の絶え（多要）にし妹を何為ると心に乗りて許多  
かなしけ（卷一四・三五一七）

雲は「絶ゆ」ものであり、途切れて居なくなるといふ認識が  
基底にある。それ故例4は逆に、三船山に決して白雲が居なく  
なる日はないであろうと詠むことにより、「王」の永遠の生命  
と繁栄を寿ぐ歌となっている。例5は、白雲が途切れることと  
「妹」との仲が切れることを「絶ゆ」で掛けている。「恋」につ  
いても、

6 玉の緒の絶えたる（絶而有）恋の乱れなば死なまくの  
みそまたも逢はずして（卷一一・二七八九）

7 君によりわが名はずでに立田山絶えたる（絶多流）恋  
のしげき頃かも（卷一七・三九三二）

など、例6「玉の緒の絶えたる恋」では、玉の緒が切れるよう  
に恋が途絶えてしまうことを重ねて象徴的に表現している。  
「恋」そのものを対象とする仮名表記の用例はなく、右例も漢  
字の「絶」表記である。しかし、5「白雲」、6「玉の緒」な  
どの様態に重ねて「絶ゆ」と表現される以上、「恋」も自動詞  
「絶ゆ」であると考えなければなるまい。「大系」は例7の頭注  
で「タチタル恋と訓む説もあるが、恋を絶ツという例を見ない」  
として、「絶つ」訓を否定している。

自動詞「恋ひ止む」、名詞「恋」+自動詞「止む」も、恋は  
「やまる」ものであり、「やめる」ものとは表現されない。また、  
「妹に恋ふ」と表現されるように、「異性ニひかれる」受身の  
ことと見（岩波古語辞典）、相手に引き寄せられる恋の磁場  
においては、「恋に堪へずて死ぬべく」（卷四・七三八）思い、逢  
えなくなつた恋に心乱れるならば死のうと歌う万葉集歌の  
「恋」には、「死ぬ」「まさる」「止む」「尽く」「会ふ」「絶ゆ」「継  
ぐ」「しげし」「苦し」「からし」などが近接し、恋はつらく苦  
しく、切実な情念の発露であった。その途絶えは自動詞「絶ゆ」  
「止む」と表現される。従つて、『大系』『新大系』では「絶つ」  
と訓む次例8・9についても、「絶ゆ」が真に近いのではない  
だろうか。『注釋』『全注』『新全集』『釋注』は「絶ゆ」と訓む。

8 絶つ（絶）と言はば佞しみせむと焼太刀のへつかふこと

は幸くや吾君（巻四・六四一）

9 なかなか絶つ（絶）とし言はばかくばかり気の緒にし  
て吾恋ひめやも（巻四・六八一）

10 夕さればみ山を去らぬ布雲の何か絶え（多要）むと言  
ひし兒るばも（巻一四・三五三三）

前述例7は「絶ゆ」と訓じた『大系』『新大系』も、ここは「絶つ」と訓み、『新大系』は例8の頭注で「絶つ」は『大刀』の縁語」と述べている。これらも漢字「絶」の表記である以上、「絶つ」と訓む可能性もなくてはならない。しかしながら、「布雲」が「絶ゆ」とことと掛けて、「言ふ」が下接する例10の仮名表記例と同じく「タユ」と訓むべきであろう。『全注』は「男女の縁切りに他動詞タツを使うべき場合でもタユで表わすのが一般」、『新全集』も「男女の縁切りを表すには、絶ユとか切レルとか自動詞を用いるのが通例」と述べている。恋は、仲を絶つ、想いを切るといった作爲的・人爲的行為ではなく、夫や恋人が訪れなくなり、二人の仲が終わる、恋が途絶えるという恋に内在する作用として認識された。

万葉集において「立」は、用字法からは「タツ」と訓読する。

しかし、主体が「雲」「恋」であることから他動詞「絶つ」とは把握できない。問題歌は平安朝になると、「君が着るみかさの原に居る雲のたえてはつがる恋もするかも」（古今和歌六帖五「かさ」・三四六三）「君が着る三笠の原に居る雲のたえてはかへる恋もするかも」（夫木和歌抄卷二「原」読人知らず・九九四〇）と異同が生じているが、やはり平安朝においても

「雲」「恋」は自動詞「絶ゆ」である。従って、当該歌は「立てば」としてのみ把握される。

## 二 条件節「立てば」について

次に条件節「立てば」について考察してみたい。小山氏は「已然形＋ば」の条件節において、前件と後件に「逆の意味を示すといえるほどの距離」という認識を示されたが、「前件（已然形）＋後件」において前件・後件の関係は、次のように把握できる。

- 11 石橋に生ひ靡ひける 玉藻もぞ ①絶ゆれば（絶者）生ひふる 打橋に生ひををれる 川藻もぞ ②枯るれば（干者）はゆる 何しかも わご王の 立たせば 玉藻のもころ 臥せば 川藻の如く 靡かひし 宜しき君が …（巻二・一九六）
- 12 家に①あれば（有者）筥に盛る飯を草枕旅にし②あれば（有者）椎の葉に盛る（巻一・一四二）

例11において、①の玉藻が「絶ゆ」と「生ふ」、②の川藻が「枯る」と「はゆ」は、前件・後件の表す動詞の意味が対立している。ところが例12においては、①の前件「家にある」ことを既定・確定条件として、後件「筥に盛る」ことが起きることを表し、②の「旅にしあれば」も「椎の葉に盛る」ことの既定・確定条件であることを提示するものであり、その歌意は、家

にいと器に盛る神饌を、今捕らわれの身の旅にいたので椎の葉に盛る、その日常的行為である神饌の器すら思うにまかせない状況を「家にある」ことと「旅に（し）あ」ることの対比において詠じたものとされる。<sup>注1</sup>例12の前件となる条件節「已然形+ば」は、後件の起きる既定・確定条件を提示するという機能は認め得ても、前件と後件の間に「逆の意味を示す」と限定されるものではない。その機能は、明らかに原因・理由を表す以外は、「Aすると、Bする」という、Aを契機としてBが起きることを表すと把握しておいてよいのではないかと思う。

しかしここで今一度、例11に注目したい。①「生ひ靡ける玉藻」は「絶ゆ」ことを契機として再び「生ふ」のであり、②「生ひををれる川藻」も「枯る」ことを契機として再び「はゆ」と表現される。即ち、前件の条件節における「絶ゆ」「枯る」は後件に対してのみならず、主体の「生ひ靡く」「生ひををる」動作・作用概念とも対立している。主体の「生ひ靡く」「生ひををる」動作・作用は「絶ゆ」「枯る」という断絶・中断を契機として、再び「生ふ」「はゆ」動作・作用が起きることを表しているのである。

この点を問題歌と類歌の山部赤人作「高枝の三笠の山に鳴く鳥の止めば継がる恋もするかも」(巻三・三七三)について検討すると、三七三番歌の主体は「鳴く鳥」であり、「鳴く」と条件節の「止む」は対立概念である。問題歌も主体の「居る」と条件節の「立つ」は対立する。両歌は、主体の「鳴く」「居る」ことが「止む」「立つ」ことを契機として、自然と「継が」れることを言う。その継続作用は「止む」「立つ」ことに対し

てではなく、中断された「鳴く」「居る」ことに対してであると考えなければならない。

### 三 類歌との検討について

次に、問題歌が結句を「恋もするかも」と結ぶ類型的な歌である点から考えてみたい。問題歌と次例13～18の全7首があり、「継がる恋」「繁き恋」「間無き恋」「かつても知らぬ恋」「ほには咲き出ぬ恋」「空なる恋」を詠んでいる。

- 13 高枝の三笠の山に鳴く鳥の止めば継がる恋もするかも (巻三・三七三)
- 14 貌鳥の間無く数鳴く春の野の草根の繁き恋もするかも (巻一〇・一八九八)
- 15 には清み沖へ漕ぎ出る海人舟の楫取る間無き恋もするかも (巻一一・二七四六)
- 16 をみなへし咲く沢に生ふる花かつみかつても知らぬ恋もするかも (巻四・六七五)
- 17 言に出でて言はばゆゆしみ朝貌のほには咲き出ぬ恋もするかも (巻一〇・二二七五)
- 18 この山の嶺に近しとわが見つる月の空なる恋もするかも (巻一一・二六七二)

一般的に問題歌では、「君が着る三笠の山に居る雲の」が序詞と把握されている。鈴木日出男氏は和歌における枕詞・序詞

表現を「心物対応構造」という視点から説かれているが、和田明美氏は万葉集における恋の「象徴表現」として次のように述べている。

「恋」を導く序詞は、観念的な虚構ではなく、古代的な自然把握にもとづくものと言える。つまり、自己をとりまく自然の中にわが心や恋の在り方を見出し、その景に重ねながら恋心を具象化する「実」のある象徴表現なのである。

「君が着る三笠の山に居る雲の立てば継がる」の構文において、「雲の」の格助詞「の」は上接語が主体であることを提示し、以下でその主体の動作・作用を述べているが、「の」と呼応する活用語の連体形は一つのまとまりを形成することから右例でも□のまとまり部分全体が「恋」を具象化する表現となつている。こうした鳥や雲などの景は、やはり単なる修辭としてではなく、人々と一体感をもって認識されていたと考えられる。

ところで、問題歌は類歌の卷三・三七三番と明らかに表現が照応している。

イ 君が着る 三笠の山に 居る雲の 立てば 継がる  
恋もするかも

ロ 高松の 三笠の山に 鳴く鳥の 止めば 継がる  
恋もするかも

しかも三七三番の長歌である三七二番は次のように歌われている。

19 春日を 春日の山の 高座の 三笠の山に イ朝さらす

雲くもみたなびき 口容鳥くみづの間なく数鳴く 雲居なす 心  
いさよひ その鳥の 片恋のみに 昼はも 日のことごと  
と 夜はも 夜のことごと 立ちてゐて 思ひそわがす  
る 逢はぬ兒ゆゑに(卷三・三七二)

長歌の口「容鳥の間なく数鳴く」ことが三七三番反歌では「鳴く鳥の止めば継がる」と表現され、郭公かとされる「容鳥」は三笠山で間を空けず何度も「片恋」に鳴いているのである。同時に、三笠山にイ「朝さらす 雲みたなびき」く景を対置し、「雲居なす 心いさよ」う恋心の有り様が具体化されている。三七二番長歌では、三笠山に朝ごとにたなびく雲と、絶えず鳴く容鳥の様が視覚・聴覚から具体的に描出され、更には昼も夜も何をもと、時間的・身体的にもわが心を占有する「片恋」が形象化されているのである。

類歌との関係について「注釋」は、「私注」が問題の二六七五番歌は赤人の歌の「民謡化」と推定し、表現が稚拙であると述べたことに「同感である」とする。作歌順序については、「新大系」の言う「前後関係は不明」とするのが妥当ではないかと思うが、三七三番反歌は三七二番長歌の「容鳥」の鳴く聴覚において詠んでいるのに対し、二六七五番歌は「雲」という視覚において詠み、また三七三番は男の歌であるが、二六七五番は女の歌であるという違いが見られる。従来の注釈書は、二六七五番歌の「立つ」と「継ぐ」の呼応関係に不審を示し、雲の「立てば継がる」景の把握にも疑問が残るのであったが、二章で述べたように、問題歌と例11・13の条件表現においては、条件

節は主体の動作・作用が中断する契機を表し、再び中断する以前の主体の動作・作用が自然と継続することを表していた。つまり「鳴く鳥の止めば継がる」は、条件節の「止む」ことを「継ぐ」のではない。主体である「鳴く鳥」が「鳴く」ことを中断すると、再び「鳴く」ことを「継ぐ」のである。同様に問題歌も、三笠山に「居る雲」が条件節の「立つ」ことを契機として「居る」ことを中断すると、再び「居る」ことの継続を表す。従って「立てば継がる」を、雲が立ち始めると次々と湧き出る様と解釈することはできないと言える。

#### 四 万葉集における「雲」について

右の考察を踏まえ、「三笠山に居る雲の立てば継がる」景がどのような雲の実景であるのか、万葉集における「雲」の表現から検討してみたい。集中「雲」は65例、「天雲」42例、「白雲」34例、「雲居」23例、「青雲」4例など計206例があり、近接する動詞には「たなびく」31例、「立つ」22例、「居る」12例、「ためたふ」「継ぐ」各3例、「絶ゆ」2例などがある。特徴として次の点を挙げることができる。

- ① 「常にあらむ」「絶ゆる日あらめ」「ぬぬ日無し」「止む時なし」「常に見る」などと呼応し、常に山や野に「雲」を見ることのできるという認識がある。
- ② 「雲」の幾重にも重なり広がる様や、常に野や山に出ている姿に、募る恋心を重ねて表現する。
- ③ 「雲」は「人間の靈魂の現れ」(『釋注』)「生命力や靈魂

の象徴であった」(稲岡耕二編『別冊国文学 No.46 万葉集事典』学燈社一九九三年)とも捉えられるように、いつも見たい恋しい人を偲ぶよすがとなり、茶毘の煙も「雲」と表現される。

- ④ 「遠し」「遠隔」「外に見し」「外にのみ見つ」などとも呼応し、空遠く隔てある所にあるものと認識する。事例を見ていこう。

- 20 春日山朝立つ雲のぬぬ日無く見まくのほしき君にもあるかも(巻四・五八四)
- 21 春日なる三笠の山にゐる雲を出で見ることに君をしそ思ふ(巻一一・三二〇九)
- 22 春日野に朝ある雲のしくしくに吾は恋ひまさる月に日に異に(巻四・六九八)
- 23 春楊葛城山にたつ雲の立ちても坐ても妹をしそ思ふ(巻一一・二四五三)

例20は大伴坂上大嬢から大伴家持に贈られた歌で、春日山に朝立ちのほる雲が居ない日はないように、毎日見たい「君」であると詠んでいる。例21では、三笠山に出ている雲を自分が外に出て見るたびに「君」を思うのであるから、三笠山にはいつも雲が出ていることが読み取れる。例22では、「春日野に朝ある雲」が「しくしくに」幾重にも重なる様を募る恋心に重ね、例23でも「たつ雲」から「立ちても坐ても」を導き、何をしても「妹」を思う恋心が具体化される。このようにい

つも野や山に出ている「雲」は、恋しい人への募る思いを喚起させ、「雲」の様態に切実な恋心の有り様を重ねるといふ、自然と人事を一体化する表現として用いられたのであった。

ここで注目したいことに「雲」と「山」がセットで詠まれるという点がある。三笠山詠の16首中3首は、例19「朝さらず雲居たなびき」、例21「ある雲を出で見るごと」などとなるが、それは三笠山のみではない。例4の「三船の山」、例20の「春日山」を始め、「夕さればみ山を去らぬ布雲」(巻一四・三五・一三)「瀧の上の三船の山に居る雲の常にあらむ」(巻三・二四二)「青山の嶺の白雲朝に日に常に見れども」(巻三・三七七)など、常に去ることなく居、立ち、たなびく雲と山を組み合わせた歌は集中に44首見られる。『大系』は三七二番歌の「雲居なす 心いさよひ」を「その雲のように心は妹になびき寄って動かず」と把握しているが、山に取り付くように常に座を占め、立ち、たなびく雲の景は、絶えず自らの心にかかり、心を占め続ける恋の思いに重ねられる、恋しい人をもつとて人々に認識されたのである。

ならば、雲の「立てば継がるる」景の把握において、「立つ」「継ぐ」はどのような雲の動作・作用概念を捉えているのであろうか。その語義を明確にしてみたい。まず「立つ」であるが、「立つ」の主体は、雲の他に、霧・夕霧、霞、波・川波・白波・沖つ波、煙などがあり、辞書では次のように説明されている。「たて(縦)」「たたさま(縦様)」などと同根の語で、縦にまつすぐな状態になるの意が原義であろう。これが下から上に向かって現れ出るような意となり、さらに見えな

かったものが表面に現れるのような意味を持つに至ったものであろう。(小学館古語大辞典・語誌・山口佳紀)

問題歌では主体の「居る」ことと条件節の「立つ」に対立関係が認められたのであるが、例23で「立ちても坐ても」と表現されているように、「居る」と「立つ」は対比概念である。「居る」は、例23「坐ても」の原文表記が漢字「座」である点も参照できるように、座を占めて、「比較的短時間の存在を意味している」語である。一方の「立つ」は、上方に向う動きの発現・顕在化を意味する。山口氏も指摘されるように、何もないとこに雲や霧が「立つ」ならば、それは雲や霧が発生する顕現・顕在化を言うが、当該のように既に「居る」雲が「立つ」とは、山上に座を占めて動かずにいた雲が上昇する動きの顕現・顕在化を言うといえなければならぬ。ここに「居る」「立つ」が対になった異伝歌がある。

- 24 瀧の上の三船の山に居る雲の常にあらむとわが思はな  
く(巻三・二四二)
- 25 三吉野の御船の山に立つ雲の常にあらむとわが思はな  
く(巻三・二四四)

例25は、例24を「或本歌」として人麻呂歌集に記載するもので、弓削皇子が吉野で詠んだ二四二番歌の「居る雲」が、「立つ雲」と変化している。共に三船山に現れ出た雲の類似する景を表すのであるが、例24は激流の水の動きとは対照的に座を占めて不動の「居る雲」が捉えられ、例25では逆に、立ち現れ、

頭在化する雲の動きが人の生命力を喚起するものとして表現に有効に作用していると思う。

次に、「継がる」は動詞「継ぐ」に自発の助動詞「る」が接続したものであるが、「雲」を主体とする「継ぐ」例は、問題歌と例3の他に次の東歌1首のみがある。

26 伊香保ろに天雲い継ぎかぬまづく人とおたはふいざ寝

しめとら (巻一四・三四〇九)

第三句以下の意味がわかりにくいいため、「大系」は「伊香保の嶺(榛名山)に天雲がつぎつきにかかるように、カヌマツク人たちが静まって来た。さあ共寝をさせよ。いとしい子よ」という試解を示したが、今日の注釈書も未だ明快な解釈を示し得ていない。この歌には類歌「岩の上にい懸る雲のかまづく人そおたはふいざ寝しめとら」(巻一四・三五一八)がある。「い継ぐ」「い懸る」など動詞に上接する接頭語「い」の語義は「すでに意味不明」とされるが、「継ぐ」は「ツゲ(告)と同根。長くつづくものが絶えないように、その切れ目をつなぐ意」(岩波古語辞典)と把握される。「切れ目をつなぐ」のであるから、当然例3「或本歌」の「白雲の絶え(多延) つつも継がむ」は、切断を回復しながらも繋ぐという順当な呼応である。日本書紀歌謡にも「設弦 絶え(多曳) ば継がむに」(四六)例がある。しかし「継ぐ」は、現実として既に切断していることが前提となるのであろうか。集中50例ある「継ぐ」には、次のような例がある。

27 何せむに命継ぎけむ妹子に恋ひざる前に死なましもの  
のを (巻一一・二三七七)

28 ありさりて後も逢はむと思へこそ露の命も継ぎつつ渡  
れ (巻一七・三九三三)

「命(も)継ぐ」のであるから、それは今現実には切れてしまった命を繋ぐことではない。「継ぐ」の主体は、断絶する属性を持つものでなければならぬが、今切断していることを必須条件とするわけではない。例3の本歌における「ありつつも継ぐ」例も、白波が立つことを断続的に反復しながら、継続して立ち続ける様を表すことによって、継続する恋を象徴する表現となっている。問題歌の「居る雲」も「絶ゆ」属性を持つ主体であるから、今「立つ」という上昇する動きを頭在化させたことによつて、「大系」の言うように山上からは姿を消すであろう。しかし、自然と「継ぐ」行為が起り、再び雲の「居る」状態が出現するのである。「大系」の「消え失せるとすぐかかつて絶えない」という大意の把握は、優れた洞察力に基づくものではあるが、そのままには従えない。右に述べた雲の「居る」「立つ」「継ぐ」動作・作用概念の精確な把握と、類歌との比較考察によつて、問題歌の担っていた象徴表現としての本質が明確になったのではないかと思われる。

## おわりに

万葉集巻一一・二六七五番歌は、結句を「恋もするかも」と詠む類型的な歌である。本来「恋」は、

29 八釣川水底絶えず行く水の続きでそ恋ふるこの年頃を

(巻一一・二八六〇)

30 留りにし人を思ふに蜻蛉野に居る白雲の止む時も無し

(巻一一・三二七九)

など、制御しがたく異性に惹かれ、執着する心の表出である。逢えば一時的に慰められることはあるにしても、一時も止むことなく心を占め、辛い・苦しいものとして捉えられることが多かった。『注釋』は、三二三番歌の「止めば繼がる恋」の表現は恋が休止することを言うかのようにであり、「恋の中休みではおだやかではな」い、従って「思ひしづめて、といふあたり

の気持と見るべきであらう」とされた。

しかし、本稿での考察から、三二三番と二六七五番歌において、主体が「鳴く鳥」「居る雲」であり、それを「繼ぐ」ことに大きな意味があつたと考えなければならぬ。即ち問題歌では、三笠山に座を占めていた「居る雲」が、「立てば」という上昇する動きの顕在化を契機として、自然と「繼ぐ」継続作用が起き、常に三笠山に雲が「居る」景を描出する。その常に継続して「居る雲」の景こそが、赤人の三七二番長歌では「昼は

も日のことごと」「夜はも夜のことごと」「立ちてみて」と表現された、絶えず執着し、心を占有し続ける切なる恋心を具象化する表現であつたと思う。

注1 『万葉集古義』(鹿持雅澄)『万葉集注釋』(澤瀉久孝)『岩波日本古典文学大系』『万葉集私注』(土屋文明)『万葉集全注』(第四巻木下正俊)『小学館新編日本古典文学全集』

『萬葉集釋注』(伊藤博)『岩波新日本古典文学大系』を「古義」『注釋』「大系」『私注』『全注』『新全集』『釋注』『新大系』と略称。用例の引用は「大系」に拠つた。

2 『万葉集二六七五番歌』立てば繼がるる」について」(『日本文学誌要』第67号、二〇〇三年三月)

3 佐藤武義「翻訳語としての万葉語の考察——『白雲』を中心にして——」(『解釈』21—11、一九七五年一月)

4 寺川真知夫「椎の葉に盛る飯——有間皇子の一四二番歌の解釈——」(『解釈』21—11、一九七五年一月)。「釋注」も一四二番歌との関連から神祭りの歌と解し、「已然形+ば」は「習慣的事実を言い表わす」と把握している。

5 鈴木日出男『古代和歌史論』(東京大学出版会一九九〇年)

6 和田明美『古代的象征表現の研究』第七章万葉集の恋の歌とその表現(風間書房一九九六年)

7 山崎良幸『日本語の文法機能に関する体系的研究』第三章文における統合体の形成(風間書房一九五五年)

8 戸谷高明氏は「雲を歌うことは趣味的文芸的といわれる以前の生活的日常的な範囲のもの」(『万葉集の「雲」再考』

9 『學術研究国語国文学編』28(一九七九年二月)とする。  
阪倉篤義「動詞の意義分析―キルとヲリとの場合―」(『国  
語国文』46―4、一九九七年四月)

本稿は、平成十八年一月二十二日、美夫君志会一月研究発表会  
(於中京大学)における口頭発表も踏まえており、ご指導頂き  
ました諸先生方に深く感謝申し上げます。

(やまざき かずこ・博士後期課程三年)